



日英と表象を中心に考える

文化の面白さと 奥深さの探究

CONSIDERING FASCINATION AND RICHNESS OF CULTURE

立命館 みらいゼミ
Ritsumeikan Mirai Seminar



ゼミの概要・目標

「日英文化」と「表象文化」をテーマに、自身の身近に存在する様々な文化（映画、絵画、音楽、出版物など）を単なる娯楽としてではなく学問として捉えるため、多様な背景を持つ学生と複数言語を用いて話し合い、共有し、実践的に経験するゼミ

01

自身の身近にある表象について議論・考察することで、文化に関する学びへの導入となる基本的な知識やきっかけをつかむ

02

第二言語を使い、バックグラウンドが違う学生と交流する機会をつかむ



ゼミ活動

活動スケジュール

秋学期（12月～3月）
月曜日、金曜日をベースとした不定期



フィールドワーク時の集合写真

ディスカッション

それぞれが興味のあるトピックと、それについて持った視点や疑問点についてゼミ内で共有し、他にどのような観点から考えることができるか、自身の意見などを自由に議論しました。なお、映画×国際関係論、万博パビリオン×東洋思想、日本お笑いとその変遷、映画×資本論などのテーマがディスカッションの中で出されました。

フィールドワーク

3月17日に京都国際マンガミュージアムおよび細辻伊兵衛美術館へフィールドワークで赴きました。マンガミュージアムではマンガの表象について、細辻伊兵衛美術館では手ぬぐいに描かれた「イケメン」の表象について実物を鑑賞した後、多様な出身地のメンバーそれぞれが持つ実体験をもとに日本の表象とその他の国の相違点や意味と表現のつながりなどについて話し合いました。



ゼミで得たこと・学んだこと

多様性のある交流機会

様々な学部・回生・出身の学生がメンバーとして集まったため、普段出会わないようなメンバーと日本語・英語の2言語を用いて意見交換と交流を行う場を作ることができました。

分析に役立つ視点

ディスカッションの活動を通してそれぞれが知識として持っている理論や概念などを伝え共有することで、文化を分析する際に役立つような知識を学び合うことができました。

日本の表象文化の再認識

フィールドワークを通して、表象文化を自己の経験や他メンバーの経験の視点から比較・考察することで、日本の表象文化について客観的に見つめ直すことができました。



ゼミにおける 反省点・課題

スケジュール管理

メンバーのスケジュールがなかなか合わなかったため、当初行いたかった活動を全て行うことができなかった

→活動予定日をメンバー確定の前にあらかじめ定めておくことや、スケジュールの調整を早い段階である程度行なっておくことが必要

ゼミ運営

立ち上げ人がゼミ運営に関する殆どのタスクを請け負っていたので、立ち上げ人が参加できない際などに活動が滞ってしまった

→ゼミで行う予定の内容や準備物、各活動の進行方法などを立ち上げ時メンバーを中心に共有し、分業することが必要





ゼミとして発信したいこと

表象文化は普段の生活と近いところに存在しているため、一見すると学問に結びついていないように思われるかもしれませんが。趣味や娯楽の範疇で享受する人も多くいるように思われます。しかし今回のゼミでの多様なメンバーとの活動を通して表象を客観的に分析したり、既存の別分野ないしは隣接する分野の理論と結びつけて考えたり、自身が普段意識したことのない表象文化のトピックと出会い新しい概念が生まれたり、多くの学びがありました。そして、自身の興味を軸として同じ興味を持つ他の学生とともに学び、考える場所の重要性を痛感しました。本ゼミは課題解決型の内容ではないためリサーチ結果などの明らかな成果を発信することはできませんが、表象文化だけに限らず自身が興味を持ったり気づきのあったトピックについて、それが仮に学問と直接結びついていないように見えるものでも、そうであるからこそ、ぜひ他の人と深く考えてみたり、話し合ってみてほしいです。そのような際に最も有効な手段の一つがみらいゼミであると今回の活動を通して感じたため、自身の中に「こんなことについて深く話してみたいな」というものがある方にはみらいゼミに登録して活動してみてほしいと思います。

